

IHJアーティスト・フォーラム

音楽のあるコトバー二人のアメリカ人 詩人による朗読会

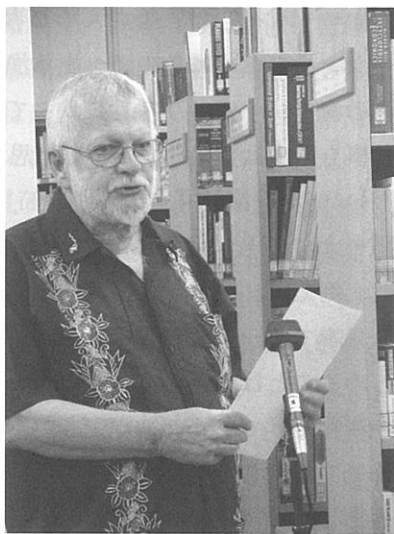
クリストファー・ブレイズデル
国際文化会館芸術監督

2010年5月17日に国際文化会館図書室において、サム・ハミル氏とリザ・ローヴィッツ氏—二名の優れたアメリカ現代詩人—による朗読会が行われました。伴奏には、尺八が演奏されました。

サム・ハミル氏はアメリカ西部育ちですが、彼の世界観は、中国や日本の古典的な詩人の影響を受けています。ハミル氏の詩は、彼が尊敬していたアメリカの20世紀の著名な詩人、ケネス・レクスロースと同様、アジアの伝統を汲み、仙人を思わせるような謙遜と畏敬の念を表現しています。文体は非常に洗練され、ことばは音楽性があふれています。

ハミル氏は1988年に「日米芸術家交換プログラム」で初めて来日して以来、この22年間に、アメリカの詩の世界において大きな影響力を持つようになりました。氏の作品は12カ国語に翻訳されています。

ハミル氏はことばを巧みにつづる詩人である一方、真情あふれる平和



主義者でもあり、刑務所での教育活動や家庭内暴力を受けた女性や子供を助けるなど、さまざまな社会運動も行っています。

彼は長年抱き続けている平和主義の信念を詩の中で表現しています。「古代ギリシア、アラブやユダヤの文化から中国の『詩経』の時代にいたるまで、詩は常に政治的・社会的であり、戦争と社会の不正についての記録でいっぱいです。私の詩にも最初から政治的な側面がありました。」と、本人が自分の平和主義者としてのスタンスを説明しました。

また、2003年にハミル氏はブッシュ政権時にホワイトハウスで行われた詩のシンポジウムに招待されましたが、当時始まったばかりのイラク戦争への反対を理由に出席を辞退しました。そしてそれを機に「反戦する詩人たち」というグループを立ち上げました。平和を愛する世界中の詩人たちからの反応は極めて大きく、反戦を訴える詩が世界各地から寄せられました。集まった詩は二万篇にも上り、今までにない長編詩集として、オハイオ州立大学に永久保存されています。

ハミル氏は1972年にアメリカで数少ない詩の専門出版社、コッパーキャニオンプレスを設立し、2004年まで編集長を務めた経歴も持っています。

10年以上日本に住むアメリカ人女流詩人・作家のリザ・ローヴィッツ氏は、ハミル氏と同様、詩と真摯に向きあっていますが、彼女の作品は抒情豊か且つしばしば驚くほど赤裸々で、ハミル氏の詩とは異なる雰囲気を持っています。彼女の詩には長年のヨガと禅の修行が反映され、そのことばは、心を開いて生きることの大切さを問いかけています。長年の日本での生活から、日本文化、自分自身、そして文化における彼女自身に対する客観的視点が育くまれました。また、ローヴィッツ氏が共訳した作品は、個人的な目線から日米関係を洞察しているものが多く、例えば、文学や芸術、社会における変わりゆく日本女性の役割、あるいは戦争の影響と現代日本における戦後和解への願望などがあります。

今回のフォーラムは会館の図書室での二回目の開催となりました。本棚に囲まれたアットホームな空間で、作者自身による詩の朗読をすぐそばで聞くことができました。

フォーラムのタイトル、「音楽のあるコトバ」は、詩が「目で読む」だけのものではなく、「耳で聴く」ものでもあるという意識からつけられたものです。ハミル氏は詩を書くことはまずことばの響きから入らなければならないと主張します。詩は紙面で文学として美しくても、実際に語ってみて、各ことばの朗々とした響きを持っていないと生きてきません。確かに自分の詩を朗読するハミル氏の多彩な音色のハスキーな声はとても印象的でした。

一方、ローヴィッツ氏は自分の詩を悠々とした声で読み上げ、ハミル氏の朗読に比べてしなやかなところが対照的でした。

私は尺八で朗読の伴奏をしました。二人の朗読には前々から何度も音楽を付けてきましたので、また二人と「共演」することができ、大変光栄でした。今回の尺八の役割は、音楽を投げかけ、朗読された「コトバ」の音楽性をさらに引き出すことだったと思います。

以下に、ハミル氏の詩を日本語訳でご紹介します。

ランの花 The Orchid Flowers

by Sam Hamill

枯れるのではと
心配したばかりなのに、
ランの花が咲いた、

ひどく動かされた心を
うまく説明できない、
長くひょろりとした茎の

小さな蕾や、真夏に咲いた
血のように赤くって金色の、

小さくって完璧に咲き
ほこる花がくれる喜びを。

白髪頭のいかつい
詩人にとってさえ、
エロスの極みだね、

雌しべ、雄しべ、花粉、
この世の露、わずかの

土、そして水。
死あればこそその誕生は
エロチックなのだ、

あの昔ながらの朝日のドラマ
濡れたスギの枝がきらめく、

夕食の皿洗いや
妻への冗談が
すごく神秘的なのだ、

そう、妻はもっと美しくなる
片方が死んでしまうので。

(日本語訳：経田佑介)